

こぼれ話 20

日野の念仏講

念仏講は、村の人々が念仏を唱える集まりのことで、かつてはどの地域にも組織されていました。日野市域では、江戸時代中期には成立していたといわれています。

講の機能には、二つの面がありました。一つは村人の葬送に関する相互扶助を行う組織。葬儀社などなかった時代、村の人々は、互いに助け合って葬儀から埋葬までを行いました。これを組織として行うのが念仏講で、村の全ての人が加入し、役割を分担しました。

二つ目は、毎月、日を決めて集まり、念仏を唱えることで、亡くなった人や先祖を供養するという月並念仏です。これは念仏を唱えるほか、互いに語り合い、飲食も伴うもので、あまり外出の機会がなかった女性たちには、数少ない娯楽の場として、楽しみなものでありました。講はメンバーの家を回り持ちしたり、村のお堂などで開催されました。記念の年に建立された六地藏などの石仏も多く残っています。昭和四十年代には、市内で二十八カ所確認されていました。時代の変化に伴って減少し、最近では、日野の坂下地藏講や南平の独り地藏講など、数カ所を残すのみとなっています。



▲北原(日野本町)のとんがらし地藏の最後の念仏講(2015年2月)